日本経済新聞
2015年
11月25日
水曜日
《広島経済面》

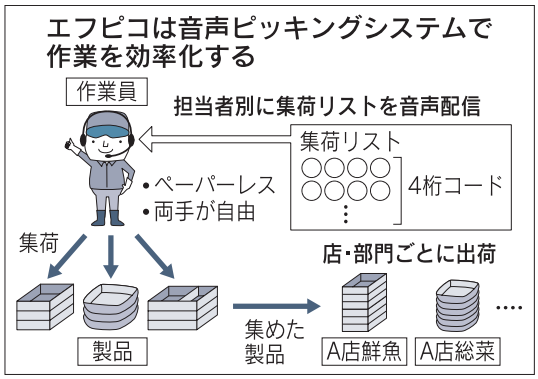
トレー仕分け 音声で指示

頭部に装置装着 作業効率2倍に

食品トレー最大手のエフピコは物流拠点で各従業員に音声によって作業を指示するシステムを導入する。作業員が専用の装置を頭部に装着、音声ガイダンスに合わせ商品を仕分けする。紙に印字した数字データをもとに品物を選ぶ従来の工程に比べ作業効率は最大2倍になる。まず福山PC（ピッキングセンター、福山市）で導入を開始、全国約20カ所の物流拠点にも順次投入する。

頭部に装着した装置の音声ガイダンスに合わせて商品を仕分ける（広島県福山市内の拠点）

エフピコの物流拠点



開発したのは「音声ピッキングシステム」。既存の装置を使いシステムを自社開発した。第1弾として導入した福山PCは基幹物流拠点の一つで、食品などを載せるトレーを約1万3千品目扱う。200社、8500店舗分を同PCから出荷する。

作業員が装着する装置は小型のヘッドホンのような形状でイヤホンとマイクが付いている。装着後に自分の名前など個人情報を吹き込むと、あらかじめ登録した音声データをもとに作業員の仕事を識別し、自動的に集荷する商品の4桁の番号と個数を指示する。

例えばA店の鮮魚売り場向けにはこの番号のトレーを10枚、この番号は20枚といった具合だ。作業員は箱詰めが終わると「完了」と報告し、次の箱詰めに移る。

これまでの集荷作業はB4判に印刷したリストを作業員が確認しながら実施していた。商品名と12桁の商品番号、商品点数を目視で確認、手でリストを持つため効率も悪く、作業員への負担も大きかった。このためトレーの形状・色、商品場所などを熟知した熟練者が不可欠だった。

新システムはまず福山PCで12人の作業員が活用。1人の1時間あたりの集荷点数は従来の2倍以上の607点に増えている。1日数万枚必要だったリスト用紙が不要になり、配置する人員も2割程度減らすことが可能になった。

IT（情報技術）経営強化の一環で、取扱商品拡大に伴う経費削減と、作業現場での人員不足に対応する。今後は全国の物流拠点でも同システムを採用する計画。

エフピコは物流拠点の機能強化を進めており、約7億円を投じて、停電しても72時間対応可能な自家発電システムを全国の拠点に設置することを目指している。

許諾番号 30046018　日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。
ⓒ日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。
日本経済新聞社は、記事内容により、特定の企業・団体や商品・サービスの購入・投資等を推奨するものではありません。